

# 高齢社会をよくする 女性の会会報

No.101 1998年2月発行

高齢社会をよくする女性の会  
東京都新宿区新宿2-9-1  
第31宮庭マンション802号室  
TEL.03-3356-3564  
FAX.03-3355-6427  
郵便振替 00100-0-79477



## — 目 次 —

女たちの討ち入りシンポ	1
リレー・エッセイ⑬林慶子	6
男・老いを語る⑦岩渕勝好	7
受賞おめでとうございます	8
本の紹介、事務局だより	8

へ女たちの討ち入りシンポへ  
一九九七年十二月十三日

於・有楽町朝日ホール  
総合司会・松村満美子

### 各社論説委員大集合

— 午前の部 —

## 「21世紀の介護は安心か 高齢者福祉への初夢を語る」

出演者(五十音順)

岩 渕 勝 好 (産経新聞論説委員)	大 熊 由紀子 (朝日新聞論説委員)
小 谷 直 道 (読売新聞編集局次長)	皆 川 鞆 一 (共同通信論説委員)
宮 武 剛 (毎日新聞論説副委員長)	村 田 幸 子 (NHK解説委員)
渡 辺 俊 介 (日経新聞論説委員)	
司会・樋口 恵子	

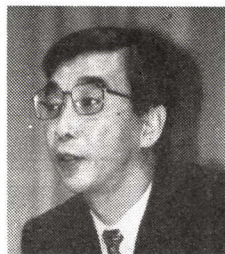
午前の部のイベントは、新聞・テレビ各社の論説委員を迎えてのシンポジウム。当会樋口恵子代表の司会で、二時間にわたる白熱した論議が展開された。

まず、司会の樋口さんが提起した、介護保険法への採点表。みなさんの提示された得点は70点台お一人、あとはみな50〜60点台。マスメディア界の介護保険の評

価は、大学の単位に換算すれば、良が1、可が6。単位取得ぎりぎりながら、まずは合格というところ。会場の反応も「こんなところか、と納得」といった雰囲気だった。次に具体的に評価できる点、問題点をあげていただく。

プラス・マイナスともに議論が…  
評価の高低のポイントは、それぞれの

渡辺俊介さん

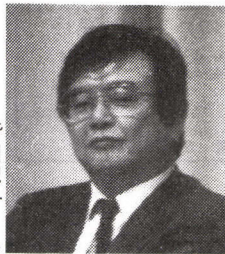


論者が、保険方式を是とするか、否とするかで微妙に分かれた。70点台の評価をされた宮武氏は、税方式より保険方式の方が負担と給付の関係がわかりやすい点を評価。問題点はいろいろあるが、法律もできたことだし、改善しながらとにかく進めていこう、という立場のようだ。

本来は「介護は税方式で」という立場の方も、国の財政との関係で、法が成立した以上、この制度を改善していくしかない。「止むなく保険派」にならざるを得ず、ぎりぎり合格の50点台を出されたのではないかと推測される。

問題は、宮武氏も含めて、いろいろな面から指摘された。

いちばん多かったのが、サービスの認



皆川 毅一さん

定のむずかしさについてだった。法律が制定されても、サービス給付を保証する実態が、新ゴールド

村田幸子さん



プランという計画だけで、いつまでに充てられるか予測がつかない。となれば認定は緊急を要する人

優先で、希望者の請求にすべて応じられるわけではなく、結果的に「保険あれども給付なし」というケースもたくさん起るだろう。認定にあたって、判定にしている不満が続出することは明らかだから、要介護認定のノウ・ハウが確立されていない現在、利用者保護の保護の仕組みをどうするか、が問われている。という意見が出された。認定システムと、その客観性の確立、利用者保護の仕組（例えばオンブズマンシステム）の必要性、

情実認定への懸念、民活も活用しての給付基盤整備、高齢者自身の利用にあたっての自覚と意識変革など、意見、提案が入り交って、ステージは息つくひまもない。



岩淵勝好さん

マス・メディアとして、この制度につ

小谷直道さん



いての正確で、継続的なキャンペーンが必要（皆川氏）という提起には全員が、共感。今後のマスメ

ディアの活動への市民の期待を受けとめてくださった。  
**地域格差はどうする？**  
保険が実施された場合のサービスに、地域間格差とバラツキが起ることについての問題も話題となった。

サービスの主体になる自治体（市町村）によって給付に大きな格差が生じたり対応のバラツキが出ることが予想され、現場にはかなりの危惧や反対意見があるという実情については、過渡的な段階では格差があるのは当然だろうが、市町村のやる気を引き出すために、進んだ地域活動の情報もできるだけ広く知らせて、は



宮武剛さん

げみを与えるとともに、市民が地域毎の状況を比較して、おくれた地域には強い要求を出し押しあげ



ることが大切。利用者、市民の介護に対する知識と自覚を深め、みんなのもの、という意識を育てれば、保険加入をしる人たちへの刺激にもなる。ともかくできるところから、やればできるといふ実例を作っていくことが暫定的には必要だ。実施しながら良くしていくしかない。といった意見で合意が得られたようだ。

### 現金給付の是非について

介護している家族に現金給付をするかどうかについては、意見は二つに分かれた。同法では一応、現金給付はしない、という方向が打ち出されているが、サービスの給付ができないので止むを得ず家族が介護している場合、現金給付しないのは論理的におかしい。少なくともホームヘルパー並の給付はあってもよいのでは。：。バウチャー利用券などの限定的条件付きの暫定措置を。



樋口恵子代表

介護による家族の崩壊を防がなければ：などの再検討の要望も少なくなかった。

一方、現金給付は家族の負担の上にあぐらをかいて、市町村の切迫感や責任感を薄める恐れがある。家族と言えば、主として女性に偏るのを無視するのでは人権問題。介護家族表彰などの轍を踏むようにならないように：などの反対も多い。司会で、老健審の委員でもある樋口さんから、女性の少ない審議会で、現金給付を認めない方向を主張するのはたいへん



だった。介護家族にとつては、現金給付反対派は悪玉にされがちだが、家制度意識の強い日本では、これを認めることは禍根を残す、と審議会の状況説明かたがたの発言があった。

### 21世紀の「高齢者天気予報」

最後に、司会の樋口さんから「21世紀、高齢者にとつての天気予報は？」との設

問が出された。「曇りのち薄日」「今厳冬で雪だが、上空は晴」「雨のち曇り、のち薄日」「曇り、所により雨、所により薄日」など、パネルに言葉や、お天気マークを書いて全員が21世紀の予報を提示。全員の方が「現状は悲観的だが、やがていくらかの明るさが：」との意志表示に、会場も同感だったのか、ざわめきと笑いがあふれた。もちろん、ステージの皆さんも、会場の参加者も、せめてそうあってほしい、との「初夢の期待と願いをこめて：」であつたろう。

しかし、制度が発足するからには、今は不十分でも、みんなが少しも早く、少しでも良いものにしていきたい、と願うのは当然で、高齢、あるいはやがて高齢者の仲間入りをする参加者が、国や自治体に要求するばかりでなく、自分たちも意識を変えて、いっしょに「良い高齢社会を創っていこう」という意志表示をしたのだと受けとめた。さすが現役トップクラスのジャーナリストの皆さんだけにいいお話を聞けた、と参加者も満足された様子だった。

ドラマ

あげてうれしい花いちもんめ

作・演出 樋口恵子

第一場 介護家族者表彰全日本サミット

「一九八五年当会で問題提起された、介護に尽くした嫁・家族表彰についての調査に基づくドラマ」

講師・渥美右桜左桜（渥美雅子）の力強い扇子の響きで幕があがる。

全国六区の表彰者代表の髭のおじさんたちが、討ち入りの音楽に合わせて入場。

「孝行嫁さん顕彰」「模範在宅介護者表彰」など、献身的に老いた姑舅を長年に亘り介護してきた人のみを受賞できる。外部サージスの利用、配偶者、就労者は対象外という厳しい条件を示す。

そこへ呼子の笛、白鉢巻き姿の討ち入り隊が入場。「表彰なんてしゃらくせえ」「表彰する町ダメな町」などと叫ぶ。更に変なオバサン二人登場（樋口、貴島）  
「ウエスト八〇、体重八〇何が悪い、

人生八〇、三つ揃いで何が悪い」、と応援する。髭おじさん怖れをなして退場。



討ち入り隊と変なオバサンの登場

第二場 あげてうれしい花いちもんめ

受賞条件に外部サージス利用も可、が過半数あるのは意識の変化の現れ。さて表彰される女性の思いやいかに。

その一 もらってうれしい花いちもんめ  
「表彰うれしい、賞金うれしい、評価がうれしい」と三人娘が歌う。

その二 もらってくやし花いちもんめ  
「もらって肩つば花いちもんめ、時間がほしい、ヘルパーがほしい、ホームが

ほしい」とくやしい嫁トリオが歌う。

嫁や家族へ介護を押しつける行政に対し、「介護の社会化を嫌う町、嫁の負担を当然とする村に明日はない」と声をあげる。そして大きな秤にのった表彰状。何と、一もんめ、どんぴしゃり。

「表彰状計ってくやしい紙一もんめ、記念日に嫁たちまとめて紙一もんめ」  
そこへ頭に三角マークをつけた当会名物の介護嫁幽霊の登場（吉武輝子）。幽霊演技に会場は笑いの渦に包まれる。

「もらってくやしい花いちもんめ、死んだらおしまい墓いちもんめ」

その三 もらうにもらえぬ花いちもんめ  
「もらうと怖いがほんとは欲しい、たまには褒めて、ご褒美ほしい」と歌いながら嫁三人、一人は女装した大熊一夫さんのバリトンがホールに響く。

「私は村中で一番貞淑といわれた嫁よ、朝は朝星、夜は梅干しで姑と舅を介護」  
替え歌一〇番まで歌いきる。そして

「もらうと怖いよ花いちもんめ、介護は当然嫁いちもんめ、表彰ご辞退嫁いちもんめ」



政治等の活動家であること、また韓国を訪れた二十年前からの知己で、当時の親切な応対等お人柄についても紹介された。今韓国の女性は、厳しい経済状況の中大統領選挙を控え、長い間の現状維持の



とそれぞれに歌う。日本各地の介護者表彰の实情とその背景について当会理事、運営委員総出によるドラマの幕は下りた。

### 韓国の女性事情最新情報

鄭 光護

(元韓国日報論説委員)  
消費者保護団体協議会会長

理事吉沢久子さんより鄭さんは福祉、

考えを変えようとしている。しかしファーストレディの座に座るのは誰か、に関心が高まっているのが現状。

#### 韓国の高齢化事情

女性の平均寿命が二〇〇〇年には七四歳になり、日本より一〇年の差があるが、高齢化が進み問題も出てきている。

痴呆性老人は女性が多く、それをテーマにしたドラマが流行っていること。介護については、国は表彰と勲章授与を盛んに行っていて施設づくりと一部金を拠出するだけなので、女性や福祉団体が運営をしているのが実情。寝たきりの老人介護は学生やボランティアが協力している。日本は政府に多くを頼りすぎではないか、と指摘された。

#### 今後の女性の動き

これまで家に閉じこもっていた韓国の女性もあらゆる分野に進出するようになり変化が見えてきた。

今世紀はNGOが世界的に強くなってきたのであらゆる情報公開を求め、世界を動かす市民運動を楽しんで展開している、と会場の参加者に向けて呼びかけ、

白髪に赤いブレザーのよく似合う鄭さんの講演は通訳なしで終わった。

### ファイナー 六声会合唱団コーラス

箱根八里、故郷、野ばら、騎士の別れ、サンタルチア、オ・ソレ・ミオなどほとんど無伴奏による日、独、伊の懐かしい民謡八曲、そのハーモニーの美しさに会場は聴きほれた。

参加者から来年も討ち入りシンポの開催を望む声があがり、一年後の再開を約束しシンポジウムは終了した。

(記・谷嶋陽子)

赤松さんから六声会代表へ花束贈呈



林 はやし  
慶 けい  
子 こ

# 人生、 これからが本番



東京の一月は、思いもかけぬ大雪に二

度も見舞われ、車で行動している私は、  
もろくも家に閉じ込められてしまった。  
負けてはならじ、日頃の鍛練を発揮す

る時とばかり雪かき用の四角い大型シャ  
ベルを持ち出した。グツと腰に力を入れ  
エイツと積雪に差し込みパツと塀側に放  
り出すこと何百回。

車庫前の道幅約五メートルのお向いさ  
んの家の主は、二年前老人ホームに入ら  
れて無人だから二軒分の作業である。

考えてみたら、一人で黙々と何日も雪  
かきしたのは始めてのことだ。ずっと前  
は夫もいたし娘もいた。昨年までは当て

にしてない息子も日曜日には家にいた。

その息子もやっと結婚して今は神戸に在  
住、やれやれと安堵していたが、大雪の  
おかげで一人暮しを再確認した。

夫が逝って満十年が経つ。この十年は  
まるでジェットコースターに乗ったよう  
に、多くの事がめまぐるしく後に飛び散  
り、目を開けたら私は六十八歳になっ  
ていたという感じだ。

この分だとこれからの十年は更に加速  
して、ロケットに乗ったようなものかも  
知れない。

「年をとることは希望に満ちた冒険で  
ある」と、ベティ・フリーダンさんが言っ

ていたが、"ちよつと無理があるなあ"と  
思っていた。ところが最近私の中に異変  
が起きてきた。そう、フリーダンさんの  
言う通り、まるで本当にロケットに乗る  
ようにわくわくしているのだ。多分、こ  
れまでの紆余曲折的思考からぬけだして、  
私だけの人生の目的が明確に定まったか  
らだと思う。

「目的って何？」と問われても、恥ず  
かしくてとても人様には言えない。

目的に向って、今を生きる。  
「今」の積み重ねが十年になるか二十  
年になるかは分からないが、一人暮しを  
楽しみながらこれからの人生こそ本番と  
思っている。

プロフィール  
草創期のテレビディレクターを経て、  
フェミニズム運動に参加。その一環とし  
て、主婦の経済的自立のために一九八二  
年、女性だけの株式会社「ブックパワー」  
を設立する。一九二九年生れ。  
当会理事、運営委員

(今回は交渉中です。)



## それでも家族介護手当は必要だ

いわぶちかつよし

岩 淵 勝 好

(産経新聞論説委員)

1945年、宮城県生まれ。早稲田大学政経学部卒業。産経新聞政治部次長、編集委員を歴任して、現在論説委員。

「女性に介護を押しつけている」といわれた時には驚いた。なるほどそういう見方もあったのか。しかし男女が対立して相互理解が得られるのか。理解が得られないからこそ対立するのだろうか。いずれにせよ女性は介護する立場、男性は介護される立場で考えがちだ。

二〇〇〇年の在宅サービス供給量は必要量の四〇％程度だが、総務庁の意識調査では施設・在宅サービス利用希望者が大幅に増えた。利用を制限して保険料を安くする市町村がさらに多くなるう。

行政の怠慢をいくら責めても、現実の介護を放棄するわけにはいかない。保険料を徴収された上、無償の家族介護を押し付けられるのではないか。

それにしても、家族介護手当を「現金給付」などといささか抵抗感の強い表現を使ってつぶしたのは国の狡猾な財政至上主義だったのではないか。家族介護手当は、保険料の見返りを得る権利性、平等な給付を受ける公平性、自ら決定する選択性という介護保険の理念に照らして

も必要不可欠である。

とくに当初は受給権が十分機能しないだけに、選択肢を拡大しておきたい。現物給付の五分の一でも最重度なら六万円、東京都の臥床手当を上回り、財政的にも耐えられる。家族介護で疲れた時に外部サービスを使える利用券でもよい。

女性が手当を忌避しがちな傾向は子育て支援策にも共通している。金銭で自由を縛られたくないという思いが、とりわけ自立して経済力のある高学歴の女性や、男性でも学者には強いようだ。人口問題審議会でも、経済的支援の必要性はほとんど論議されなかった。

財政再建には望ましい姿勢だが、福祉が遠慮すると公共事業が世にはばかる。土建国家から効率的な福祉国家への構造改革が介護保険の役割の一つだろう。

ともあれ、「高齢社会をよくする女性の会」は「少子高齢社会をよくする女性の会」に変わらないものだろうか。子育て支援策や世代間扶養問題に女性が積極的に発言しない限り高齢社会はよくなるらない。

## 受賞おめでとうございます

映画監督の羽田澄子（当代会員）

さん一九九七年度「朝日福祉賞」を受賞

映像づくりを通じて老人福祉への社会的関心を呼び起こした羽田さんの映画『痴呆性老人の世界』（86年）『安心して老いるために』（90年）『住民が選択した町の福祉』（97年）は多くの人の共感を呼び、上映会は今も盛んに行われていますが、これからもますますのご活躍をお祈り申し上げます。なお映画に関するお問い合わせは「自由工房」（電話〇三二三四六三一七五四三）へ。

香川県の野田法子さん「男女共同参画社会づくり功労者賞」を受賞

総務庁が今年度創設したこの賞は、野田さんを含み全国で十二人が受賞。野田さんは89年の「第八回女性による高齢化社会シンポジウム・香川大会」の事務局長でした。長年にわたる活動に対し贈られたこの賞、本当におめでとうございます。

## 本の自己紹介

### 『ひとり暮らして気楽に老いる』

吉沢久子著

（講談社 一五〇〇円＋税）

十年前の私には、老いの現実が本当にはよく見えていなかったと思う。八十歳という日を目前にして、肉体的にも精神的にも「これが老いというものなのか」を感じることが多くなってきた。あと何年の持時間があるかはわからないけれど、いのちある限り自分らしい生き方をしたいと思うようになった。

同じ生きるなら、明るく元気に過ごしたい。その基礎になるのは、ものの考え方であり、日常生活のたのしみ方だと、真剣に考え出したとき、たまたま朝日新聞の家庭らんに、シニアの一人ぐらしについて連載の機会を得た。

考えているだけではあまいなことも、書くことで問題を確かめられたこともあった。具体的なくらしのことをテーマに仕事をしてきた私らしく、食事の工夫や、死後のあと片づけにいたるまで、自分の生活を例に書いてみた。それをまた、一冊にまとめる機会を得たのがこの本で、これからもまた、書いていきたいと思っている。

### 事務局だより

補助椅子をすべて借り出し「二月例会」は満員御礼の中、より美しくなったモデル陣を囲んで華やかに終了しました。

次の例会は別紙ご案内の通りです。急なことで恐縮ですが、ご希望の方は直接会場へお越しください。

🌸 四月以降の予定についてご案内します。予定表にご記入いただけますように。

(一) 新年度総会、六月六日(土)午後一時三十分、東京ウィメンズプラザ（渋谷）

(二) 第十七回全国大会・東海三県大会は、九月五日(土)～六日(日)、会場は名古屋市  
(三) 歳末恒例「女たちの討ち入りシンポ」は十二月十二日(土)、会場は吉良邸至近の両国で。歴史散歩もできそうです。

🌸 次回オープンハウスは三月二十三日(月)十一時～四時までです。お出かけを。

🌸 『私の更年期事情／女50代からの生き方革命』が旬報社から近々発刊予定！コレットダウリング、落合恵子、樋口恵子ほか当会メンバーの更年期事情満載の本です。詳細は次号で。（新井倭久子）